

## ネヘミヤ記1章4節「仕え人の祈り」

### 1A 神の民への重荷 1-3

1B 尋ねる者

2B 泣く者

3B 祈る者

### 2A 心を込めた祈り 4-11

1B 座って泣く者

2B 断食

3B 祈りの内容

1C 天の神

2C 夜昼の祈り

3C 罪の告白

4C 御約束の思い出

5C 願い

## 本文

ネヘミヤ記を開いてください。私たちは先週エズラ記を読み終えましたが、バビロン捕囚以後のイスラエルの民の歴史を読み進めています。午後にネヘミヤ記 1 章から 3 章までを学びます。今朝はまず 1 節を読み、それから 1 章全体を概観したいと思います。

4 私はこのことばを聞いたとき、すわって泣き、数日の間、喪に服し、断食して天の神の前に祈って、5 言った。

ネヘミヤという人は、バビロンを倒したペルシヤ帝国の首都シュシヤンにて、王の献酌官をしていたユダヤ人でした。王にぶどう酒などを持っていく人は極めて高い役職であります。なぜなら、献酌官はいつも、その杯に毒を入れて王を殺すことさえできる人だからです。ですから、王が特別な信頼を寄せていなければいけません。

その時に、一度、ユダから帰ってきた人々がいました。そしてネヘミヤがそこにいるユダヤ人やエルサレムがどうなっているのかを尋ねます。彼らは、エルサレムとそこの住民は非常な困難の中にいて、そしりを受けていると伝えました。城壁は崩されて、門も火で焼き払われていると答えます。それでネヘミヤは泣きました。そして祈りました。そして行動に移しました。王にエルサレムに帰還して、その城壁を再建する許可を得たのです。

エズラ記は、神殿の再建の記録がありましたが、ネヘミヤ記はエルサレムの再建、具体的には

城壁の再建の記録になります。私たちは、エズラ記のテーマは「神の民の建て直し」であるということ学びました。ネヘミヤ記は何がテーマになるでしょうか？「**神の民の守りと確立**」と言ったらよいでしょう。神殿を建て上げるということは、礼拝を再び建て上げること、それは教会時代の私たちには、教会を内から建て上げていくことに他なりません。

そして城壁を建て上げるということは、まさに「守りを固める」ことです。中東の地域にある町は、ついに二世紀前まで城壁の中に生きていました。それだけ外敵が多いのです。そして事実、エルサレムとユダヤ地方にいるユダヤ人たちは、城壁がないために嫌がらせを受け、反対を受けて、敵のそしりを受けていたのです。神の民は、絶えず内と外に敵がいます。激しい霊の戦いがあります。そして絶えず悪魔や悪霊による巧みな策略による、攻撃があります。そこで、私たちがどのようにしてそれらの悪の勢力に対抗するのか、そして単に建て上げられるだけでなく、その建て上げたものを堅く、しっかりとしたものにしていくのか、こうしたことを学んでいきます。

ネヘミヤという人物は、数多くの教会指導者の中で読まれています。彼の率いるエルサレム再建事業から、リーダーシップについて、神の民をどのように治め、率いていくのか霊的原則を学んでいます。彼の優れた指導力には、いくつかの特徴がありますが、その大きな一つが「祈り」です。彼は非常に具体的に再建事業を進めていきますが、それがいかに祈りによって始まり、祈りによって支えられて、祈りによって完成したかを、ネヘミヤ記を読むとはっきりと分かります。ネヘミヤ記1章は、その祈りから始まります。そこで今朝の説教題を、「仕え人の祈り」としました。

### **1A 神の民への重荷 1-3**

1-3 節を読んでみましょう。1 ハカルヤの子ネヘミヤのことは。第二十年のキスレウの月に、私がシュシヤンの城にいたとき、2 私の親類のひとりハナニが、ユダから来た数人の者といつしよにやって来た。そこで私は、捕囚から残つてのがれたユダヤ人とエルサレムのことについて、彼らに尋ねた。3 すると、彼らは私に答えた。「あの州の捕囚からのがれて生き残った残りの者たちは、非常な困難の中にあり、またそしりを受けています。そのうえ、エルサレムの城壁はくずされ、その門は火で焼き払われたままです。」そして、この知らせを受けて先ほど読んだ 4 節の、「すわって泣き、天の神の前に祈った」と続きます。

### **1B 尋ねる者**

ネヘミヤは、神の民に対して重荷を持っていました。そのことは、エルサレムへの帰還民が戻ってきた時に彼のほうから尋ねてきたことに現れています。神に仕える者は、神ご自身が持っておられる関心に自分自身も関心を寄せています。そこには、自分というものは存在しません。それは、母親が遠くの地から帰ってきた息子を出迎えるように、自分のことはどうでもよく、神の民がどのようになっているかに関心を持っていたのです。聖書ではこれを「愛」と呼び、愛は神のゆえに、また他者のゆえに、自分を忘れさせます。使徒パウロが言いました。「互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。(ガラテヤ 6:2)」

## 2B 泣く者

そしてネヘミヤは泣きました。その民が酷い状態になっているのを知って、自分のことのようにして泣きました。それだけその問題を心に入れていたということです。

新約聖書では、使徒パウロがコリントにいる人々のために泣いています。「私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私があるあなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を知っていただきたいからでした。(2コリント 2:4)」コリントの教会で、パウロの強い命令で、近親相姦の罪を犯していた男を教会から取り除きました。それでその男が悲しみによって押しつぶれそうになっています。そのパウロが前に書いた手紙というのは、それは厳しいものでした。けれども、それは怒りに満ちていたからではなく、大きな苦しみと心の嘆きをもって、涙ながらに書いていたのです。

ところで、しばしば間違えられるのが、神の行動です。アダムが罪を犯して、神が園の中を歩いておられた時、エバと共に自分の身を隠しました。そして神は、「あなたは、どこにいるのか？(創世 3:9)」と呼びかけました。これは、罪を犯したアダムとエバにとっては恐ろしい言葉かもしれませんが、いいえ、これは神が愛する、ご自分のかたちに造られた者を失ってしまった嘆きの声です。その証拠に、神は彼らに皮の衣を着せてくださいました。そして園を追放せねばなりませんでした。それは罪を宿したまま神のところにいることはできないからです。愛している者が罪を犯す時、その愛は涙と嘆きとして溢れ流れます。その愛は、「それでも良いんだよ」と言って罪を悔い改めないまま受け入れる類のものではなく、語らず、引き離すという痛々しい処置に中に表れるのです。

## 3B 祈る者

そして祈りに導かれます。神の民に関心と重荷を抱き、その悲惨な状況に泣き、そして祈りに導かれました。神は、他の聖徒たちのために祈りなさいという、執り成しの祈りを命じています。「すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。(エペソ 6:18)」使徒パウロは、これを霊の戦いがあるということを話している中で語りました。つまり、御霊の力に支えられた祈りこそが、神の聖徒たちが敵の攻撃から守られ、堅く立つことができる武器です。

祈りの武器は、敵に決定的な打撃を与えます。なぜなら、私たちの主は死んで、そしてよみがえられた勝利者だからです。悪魔は十字架と復活の御業の前で無力化されました。祈る時に、私たちの味方であられる神が悪魔の要塞を打ち砕くのです。したがって、悪魔は別の手法を取ります。つまり、キリストの内から出ていくようにおびき寄せる作戦です。つまり、私たちがひざまずいて、祈らせないようにします。そして私たちが、神に抛り頼まずに、自分の力や知恵に抛り頼むようにさせます。ですから、祈らせないようにする力に私たちは抗わないといけません。

## 2A 心を込めた祈り 4-11

ネヘミヤ記を読みますと、祈りにはいろいろな種類があります。興味深いのは、ネヘミヤは一秒か、二秒ぐらいしか祈らなかったであろう、瞬間祈禱を捧げています。王に、「あなたは何を願っているのか？」と問われた時に、答える前に神に祈りを捧げました。また、敵にそしられた時も、その場で神に彼らを裁いてくださるよう祈っています。こうした、瞬時の祈りをネヘミヤは捧げていきますが、その前に長い期間に渡って祈りを捧げていました。実に、王からエルサレム帰還の許可が出される四か月前から、ずっと彼は祈りを捧げていました。

### 1B 座って泣く者

4 節をもう一度注意してみてください。ネヘミヤが知らせを受けた時に、「すわって」泣きました。その悲しみが重かったので座りました。実は前回の学びで、エズラも座って何時間も呆然としていた場面が出てきていました(エズラ 9:4)。エズラは、ずっと座ってそれから気を取り戻して、ひざまずいて祈りました。そして涙を流して祈っている時に、シャカヌヤが異邦人の妻や子供を取り除こうという助言を行い、それを実行に移しました。ネヘミヤも同じです。エルサレムの悲惨な状況を聞いて、座って泣き、それから祈り、そして行動に移しました。

そして実は、この「座る」という言葉のヘブル語は、「留まる、住む、腰を据える」という意味で使われています。ダビデが詩篇で、自分の一つの願いは「主の家に住み、主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける」(詩篇 27:4)と言った時の「住む」が同じ言葉が使われています。

神は私たちに、立ち上がって、歩き始める前に、座していることを教えています。主が自分に何をされようとしているのか、主が私たちに、何をしようとしているのか、立ち上がって歩く前に、座るように命じられているのです。赤ちゃんと同じです。座ることを知らなかったら立ち上がれません。そして立つことが分からなければ、歩くことも分かりません。私たちはしばしば、霊的に、座ることをしないで、歩こうとするのです。「私がこういうことをすれば、良い結果が出る。」として動きます。いいえ、座ってください、そして祈ってください。座ることによって初めて、主が何をされているのか、何を命じておられるのか聞くことができます。

### 2B 断食

そして、まだ4 節ですが、ネヘミヤは「断食」しました。断食は旧約だけでなく、新約時代にも実践されていたものです(使徒 13:2)。断食をすることの意義は、「霊を養うために肉を否定する」ことです。私たちは日頃はその反対をします。肉体の養いのために、一日三回の食事、また間食まであります。そのために私たちは時間を費やして、霊の養いが疎かになります。これを逆にするのです。食べることは後にして、霊的な事柄に集中するのです。肉体は弱まりますが、霊が強められます。

ですから、完全に食事を断つことだけが断食ではありません。例えば、ダニエルはごちそうや、肉やぶどう酒を断つ断食をしていました。簡素な食事はしていたと思います。あるいは、テレビを

見るのを断つ期間を設けるのも同じ効果があるでしょう。自分の肉を日頃、養っているのを断ち、代わりに霊の養いをするのです。ネヘミヤの場合は、この悲惨な状況の中で主の前で泣くために断食をしました。

### 3B 祈りの内容

#### 1C 天の神

そして祈りの内容に入ります。5 節を見てください。「ああ、天の神、主。大いなる、恐るべき神。主を愛し、主の命令を守る者に対しては、契約を守り、いつくしみを賜わる方。」

祈りについて学びたい人は、今、学ぶことができます。祈りの中で最も大事なことの一つは、「祈っている相手」であります。誰に対して祈っているのか、であります。ネヘミヤはこれを言葉で、はっきりと言いついています。まず、「天の神」と言っています。天の神は、遠くにいる神という意味ではなく、すべて目に見えるものを治めて、動かしている主権者ということです。そして、「大いなる、恐るべき神」というのは、力ある神ですね。そして、「契約を守り、いつくしみを賜わる方」とあります。神は契約、約束を守ってくださる方です。ご自分がこうすると決めたことは、契約ですから変更することはできません。その契約に基づいて、いつくしみを賜ってください。

私たちは祈りの時に、このように主のことを思い、主がどのような方を思い出して時間を過ごします。このことをするだけで、自分の見方も変わります。大きな問題だと思っていたことが、小さな問題に見えます。自分の目にかけている色眼鏡を外して、神が持っておられる目で物事を見ることができるようです。

#### 2C 夜昼の祈り

そして 6 節をご覧ください。「どうぞ、あなたの耳を傾け、あなたの目を開いて、このしもべの祈りを聞いてください。私は今、あなたのしもべイスラエル人のために、昼も夜も御前に祈り、私たちがあなたに対して犯した、イスラエル人の罪を告白しています。まことに、私も私の父の家も罪を犯しました。」

ネヘミヤは昼も夜も祈っていました。先ほど話したように、ネヘミヤはユダヤ人のこと、エルサレムのことをずっと気にしていて、重荷をもって祈っていました。私たちにも重荷が与えられると、それが絶えず自分の心に上がってきて、それで祈りを捧げます。

#### 3C 罪の告白

そして、ネヘミヤは罪を犯したことを言い表しています。罪の告白は、神との交わりには死活的です。罪を犯しているなら、その罪によって神との交わりが途切れます。神は光であるので、私たちも罪を言い表して、御子の血で清めていただき、神に不義を清めていただくかなければいけません。それで交わりを持つことができます(1ヨハネ 1:6-9)。

注目していただきたいのは、ネヘミヤは自分もその罪を犯した者の一人に数えていることです。「私たちも」と言い、「私も私の父の家も」と言っています。続けて7節に、「私たちは、あなたに対して非常に悪いことをして、あなたのしもべモーセにお命じになった命令も、おきても、定めも守りませんでした。」自分自身のことを入れているのです。彼は個人的には、ここで話している大きな罪を犯していなかったと思います。けれども、自分自身も入れているのです。

これが、仕え人の祈りであり姿勢です。私たちキリスト者は、同じように「私たち」という主語で持って言い表すことのできる、一つのキリストの体にされた共同体です。一つにされているのですから、「この教会はこれが足りない、ここが間違っている」と評価するのは、自分自身を評価していることとなります。自分にそのまま跳ね返ってきます。実は自分が足りないのです、自分が間違っているのです。なぜなら、自分もその一部だからです。私たちは神から呼ばれて、一つの体にされたのですから、「主よ、私たちを憐れんでください。」と自分も含めて祈ります。重荷をもって執り成します。これが、仕える人の祈りです。

#### 4C 御約束の思い出

そしてネヘミヤは、主が語られたこと、主が行われたことを思い出しています。8節から10節です。「8 しかしどうか、あなたのしもべモーセにお命じになったことばを、思い起こしてください。『あなたがたが不信の罪を犯すなら、わたしはあなたがたを諸国民の間に散らす。9 あなたがたがわたしに立ち返り、わたしの命令を守り行なうなら、たとい、あなたがたのうちの散らされた者が天の果てにいても、わたしはそこから彼らを集め、わたしの名を住ませるためにわたしが選んだ場所に、彼らを連れて来る。』と。10 これらの者たちは、あなたの偉大な力とその力強い御手をもって、あなたが贖われたあなたのしもべ、あなたの民です。」

主がモーセを通して、かつて語ってくださったことです。主に立ち返れば、エルサレムに彼らを連れ帰らせてくださる、ということです。また、10節は出エジプトの出来事です。イスラエルは、エジプトから力強い御手をもって贖われました。

私たちは、聖書通読で何度も学んできました、聖徒たちの祈りは、神の約束に満ちています。主が語られたことを思い起こし、それを神に申し上げます。私たちはしばしば、神の御心が分からないと言うのですが、神の御言葉にある約束はそのまま神の御心なのです。ですから、神にそのことを申し上げることほど、効果的な祈りはありません。そして、祈っているうちに私たちが変わります。私たちの信仰が建て上げられます。主が語られたことを自分自身が思い起こすことができます。そして御霊がその祈りを運んでくださいます。

#### 5C 願い

そして最後に願いを捧げます。11節です、「ああ、主よ。どうぞ、このしもべの祈りと、あなたの名を喜んで敬うあなたのしもべたちの祈りとに、耳を傾けてください。どうぞ、きょう、このしもべに幸

いを見せ、この人の前に、あわれみを受けさせてくださいますように。」

「この人」とは、次に出てくる「王」のことです。彼は献酌官でありましたから、王の前で、願いがかなえられ、憐れみを受けることができますようにと祈っています。「憐れみ」は、すばらしいです。本当ならだめになってしまっておかしくないのに、主が願いをかなえてくださることで、主が憐れまれる時は、具体的な業が行われます。病気の人なら癒され、経済的に事欠いている人は満たされます。神の慈善の業と言えはよいでしょう。

そしてネヘミヤはこの祈りを捧げて、王から許可を受けます。午後に学びますが、この出来事がエルサレムの城壁のみならず、イスラエルの民の完全な回復、つまり彼らの王メシヤが到来するきっかけとなります。ダニエルが 9 章で預言しました、エルサレムが再建せよという命令が発せられてから七十週が定められているとあります。キリストがイスラエルに、そして世界に現れるそのご計画に従って、ネヘミヤの祈りは導かれていたのです。

皆さんの祈りも同じです。神の御心にかなった祈りをするということは、神の大きな、壮大なご計画の中で重要な一コマを演じているのかもしれませんが、小さなことに忠実でありなさい、大きなものを任せようと言われた主ですから、小さき僕は、大きな神に用いられるのです。